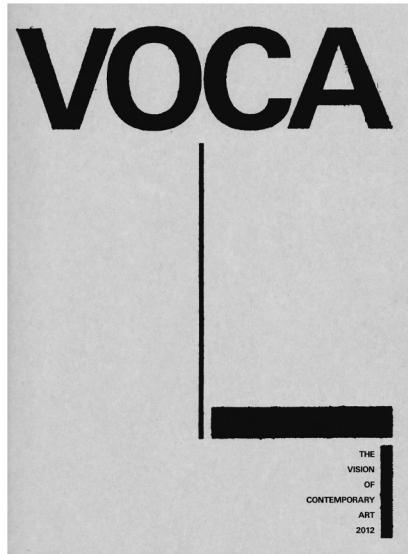


VOCA 展 2012

現代美術の展望 - 新しい平面の作家たち

3月15日—3月30日 上野の森美術館



74, 75ページより

堀川は複数の視点から観察した対象を一つの画面に統合して描くキュビズム的手法を適用し、かつその更新を試みている作家だ。彼女はまず絵画の成立要素を「対象の描き方」、「対象の見方」、「対象の立体性のくずし方」、「絵具の効果」、「余白の効果」に分類し、それぞれの要素に対して4、5パターンの原則を定める。そしてそのパターンの異なる組み合わせによって、イメージの生成を試みている。作品のタイトルはその実験パターンを記号的に表記したものだ。例えば、本作のタイト

ル「lighter, D, 凹oo-凸3, 0」の「Lighter(ライター)」は描かれる対象の名称を指し、その次のDとは、堀川が定めたA～Dまで4つの描き方のパターンのうち、Dが選択されている、ということを示している。次の凹ooは、ライターの形を幾何学的形態に還元したときに前面に現れる二つの側面(oo)の部分を凹ませて描いた、ということを意味している。それ以下の記号も同様に描写のパターンを表す。

近年堀川が描く対象として選んでいるモチーフはもっぱら100円ライターで、彼女はそ

れを日々ためつすがめつしながら、絵画の実験を日々繰り返している。ライターの構造を観察によって解体し、絵画の構造と関連付けながら作品を制作する堀川の実践は、反復の中に無限の差異を生み出す。そして、作品の余白はイメージを生成してゆくホワイトホールとして、次のひと筆が置かれるのを肅々と待っている。

高橋 瑞木(水戸芸術館現代美術センター 学芸員)